

新出資料の紹介「川上左七郎宛新島襄書簡」

布 施 智 子

二〇一二（平成二十四）年八月、東京都狛江市在住の西村守史氏から、新島襄書簡をご所蔵である旨、情報が寄せられた。西村氏よりの連絡を受け、資料調査へ伺い、当該書簡を同志社社史資料センターへご寄贈いただくこととなった。書簡は、西村氏の義伯母にあたる福並郷子氏の所蔵で、もとは郷子氏の父である故・福並定雄氏（一八八七～一九五九）から郷子氏へ引き継がれたものである。定雄氏は、生前フリーのライター、編集者として活動していたが、それ以前は徳富蘇峰（猪一郎）が主宰する民友社の社員でもあった。郷子氏が定雄氏から引き継いだ資料群のなかには、新島襄書簡以外に、伊藤博文や山縣有朋をはじめとした名士の書簡も含まれていた。これらの資料の由来は不明であるが、民友社時代に定雄氏が入手したものの、民友社から引き継いだもの、もしくは民友社を去った後に個人で収集したものととも推測できる。

今回、ご寄贈いただいた書簡は、新島襄が川上左七郎へ宛てた書簡で、その内容は、同志社大学設立運動に際して、三百円の寄附金が寄せられたことに対する礼状（九月四日付）である。『新島襄全集』には未収録の書簡で、今回が新出となる。本文の読み下しは、以下の通り（翻刻は同志社社史資料センター所長の露口卓也文学部教授による）。

【封筒】

表

川上左七郎殿

貴酬

裏

同志社

新島襄

廣瀬源三郎氏ニ托ス

【本文】

御書落掌敬て

拝讀仕候陳者兼々

御賛成相願上所

之敝社大学へ

金參百円御投与

ニ成右送金手形

正ニ落手仕御好意

之程深く奉拝謝候
何レ拝眉之上萬々
御禮開陳可仕候
右者御受迄勿々

敬具

九月四日

新島襄

川上左七郎殿

梧下

尚々別紙受取証
御落掌可被賜候

川上左七郎（一八五一〜一九一七）は、鹿児島出身の実業家で、一八八五（明治十八）年六月から二代目の日本銀行大阪支店長を務め、その後同銀行監事も務めた人物である¹⁾。また、大阪支店長時代には日本生命保険

会社の設立にも関わっている。

川上からは、送金手形による寄附金とともに書簡が送られたようであるが、残念ながら来簡は確認されていない。川上は、新島の畢生の事業である大学設立運動に賛同し、三百円の寄附金を寄せている。大学設立のための寄附金は、十銭以上であれば受け付けられ、一口あたりの金額は定められていなかった。そのため、一人当たりの寄附金額にばらつきがある。しかし、三百円という金額は、京都府知事の北垣国道や、政治家であり同志社社員でもあった中村栄助らと同額であり、またこのように新島自身が手書きの礼状を送っていることから、ある程度大口の寄附であったと言える。

川上左七郎の名前は、同志社社史資料センターに保管されている「同志社大学義捐金姓名帳 第二回募集之分」（以下「第二回募集之分」と略称する）と「各府縣別調 同志社大学義捐金者名簿」（以下「各府縣別調」と略称する）でも確認ができる。これらの記録から、当書簡が書かれた年代を特定したい。まず、「各府縣別調」は、一八九七（明治三十）年一月にまとめられた名簿で、各府県別に、寄附金額（申込金額、実際の振込金と残額）、住所、名前が記されている。川上の名前は、大阪府下の項にあり、申込金と振込金ともに三百円、所属は「大阪日本銀行」と記されている。「第二回募集之分」は、一八九九（明治二十二）年五月以降の応募者名と金額を記録した名簿である。簿冊の前半部の一八八九年と考えられる記録の並びに、九月四日の日付とともに川上の名前が確認できる。

大学設立運動（具体的には寄附金の募集）は、一八八八（明治二十一）年十一月七日に全国の主要な新聞、雑誌に「同志社大学設立の旨意」（以下「旨意」と略称する）が掲載されてから、全国的に展開されるようになった。寄附金募集の締切期限は、一八八九年四月三十日と設定されている²⁰。この間の応募者の記録は「同志社大

学義捐者名簿」にあるが、川上の名前は見当たらない。寄附金募集は締切期限を過ぎた一八八九年五月以降も引き続いて進められ、その間の記録が「第二回募集之分」に記されている。これらの簿冊から、川上は一八八九年五月以降に行われた第二回の募集で寄附金を寄せていることが分かる。第二回の募集の期間のうちで、新島が自筆の礼状を書くことができるのは最晩年のみであり、当書簡は、一八八九年九月四日に書かれたことが特定できる。

一八八九年といえば、新島は静養のために滞在していた神戸の借家で新年を迎えた年である。医師の勧めによって、京都の寒さを避けるための神戸滞在であったが、その間も、新島は大学設立運動を精力的に展開していた。大阪での運動を「同志社大学設立募金日誌」（以下「日誌」と略称する）で追うと、なかでも目立った動きと言えるのが、一八八九年二月六日に代理人を通して住友家の当主・吉左衛門から三千円という高額の寄附申し込みがあったことである。また、七月二十四日には、高島鞆之助陸軍中将、児島惟兼控訴院長、遠藤謹助造幣局長、西村捨三知事ら大阪の有力者との集会が行われたり、八月十六日には、大阪市会議事堂にて休憩中の市会議員に向けてのアピールを行うなど、新島自身も募金を集めるために奔走した。「日誌」には、川上の名前が出てこないため、どのような接触があったのかは判然としないが、書簡の書かれた年代からいって、この年に展開された大阪での運動の成果の一つではなからうか。

因みに、この書簡を託された廣瀬源三郎は京都の実業家であるが、当時は新島宅に設けられていた同志社大学創立事務所⁴で書記を務めていた。封筒には住所の記入がなく、新島は廣瀬を使いとして、書簡を川上に届けたと考えられる。

なお、この川上宛新島書簡には、徳富蘇峰による奥書と同志社の卒業生十三名による添書の二点⁵がともに残

されている。それぞれの内容は以下の通りである（翻刻は露口教授による）。

【徳富蘇峰による奥書】

明治二十三年

一月念三於

大磯客舎先

生易簀以来

既四十年矣

先生遺墨存

于人間者甚

稀築水君

須十襲寶重

云尔

昭和戊辰孟春

蘇峰迂人

【同志社卒業生による添書】

昭和三年一月二十三日

別昏書簡新

島先生自筆に

相違なきを証明候也

柏木義円

野口末彦

村田勤

三宅驥一

井上権之助

船本務

安田勝

中山光五郎

太田九之八

津下紋太郎

小崎弘道

水崎基一

松浪仁一郎

拝見

徳富による奥書は、昭和戊辰とあり、一九二八（昭和三）年に書かれたものである。奥書の内容は、一八九〇（明治二十三）年一月に新島が大磯で永眠してから四十年が経ち、新島の遺墨を持っている人も少ないなか、この書簡は「築水君」が大切に持っていたというものである。「築水」とは、書簡の元所蔵者の福並定雄の号である。この奥書によって、当該書簡が新島の自筆であること、そして福並が所蔵していたことが分かる。福並がどのようにこの新島書簡を入手したのかは不明であるが、徳富に奥書の揮毫を依頼した一九二八年は、福並が徳富の下で仕事をしていた時期（大正時代）第二次世界大戦の終戦頃にあたる。なお、徳富は新島のかつての教え子で、大学設立運動に献身的な協力をした人物である。当初「明治専門学校」と称していた大学名を、明快に「同志社大学」にすべきと進言したのは徳富である。そして、新島の大学構想と同志社における教育の目的などが論じられ、大学設立への協力を世間によびかけた「旨意」を新島の代筆で起草したのもまた徳富であった。先にも触れたが、一八八八年十一月の「旨意」発表以降、大学設立運動はこの「旨意」に基づいて展開されていき、その範囲も全国的なものとなったのである。民友社が発行した雑誌『国民之友』の誌上では、第三十四号で「旨意」全文と寄附金募集の広告が掲載された後、募集締切までの間、応募状況の概要が

連載された。特に東京方面での運動は『国民之友』を一つの媒体として積極的に展開されており、それを推進した徳富は、病軀をおして大学設立運動を継続した新島にとつてのよき理解者であり、協働者の一人である。当該書簡の奥書を依頼する相手としては、蘇峰は最適の人物といえる。

同志社卒業生による添書にも「昭和三年一月二十三日」とあるが、この日付部分は切り貼りされており、後に追加されたものである。そのため、添書が書かれた年代は不明である。添書の内容は、書簡が新島自筆の書であることを証明している。自筆で署名している十三名は、いずれも同志社の卒業生で、一八七九（明治十二）年の第一回卒業生の一人である小崎弘道をはじめとし、一八九三（明治二十六）年に卒業した津下紋太郎、水崎基一までが名前を連ねている。卒業年代にはばらつきがあるものの、全員が同志社在学中に新島襄に接しており、新島の筆を保証できる人物達である。

本資料は、軸一点と添書一点とが、一つの箱に収められた形で保存されている。新島書簡と、それに付属する二点の資料（奥書、添書）であるが、付属資料とともに、書簡が新島の自筆であることを証明している。さらに、奥書では福並が所蔵していたという来歴も示している。当センターで所蔵している新島襄書簡（和文）のなかでも、このようないわば鑑定書付きの書簡は珍しく、本資料は書簡とセットで保存されているのが特徴的である。本資料が収められている箱には、「贈従四位新島襄先生書翰 徳富先生奥書アリ」と書かれており、徳富に奥書を揮毫してもらった後に、福並によって新島書簡と奥書が軸装され、箱も誂えられたと考えられる。書簡の由来を明確にしたのは、資料が自身の手元から離れたことを考えてのことであろうか。徳富の奥書にもあるように、福並が大切に保存してきたことが窺える。

注

- 1 『東京朝日新聞』（東京朝日新聞発行所、一九一七年十月二十三日朝刊）。
- 2 新島襄「大学募金日誌」（新島遺品庫収蔵資料上〇〇五四）。『国民之友』第三卷第三十四号（民友社、一八八八年十一月十六日発行）。
- 3 「同志社大学設立募金日誌」『新島襄全集』五（同朋舎出版、一九八四年）四三四頁。なお、大阪での大学設立運動に関しては、太田雅夫「広瀬幸平・伊庭貞剛と新島襄―大学設立運動を中心に―」『同志社談叢』二十九（同志社社史資料センター、二〇〇九年）に詳しい。
- 4 『同志社時報』百七十四号（同志社時報社、一九二〇年）。広瀬源三郎「同志社大学募金会計報告」（新島遺品庫収蔵資料上〇〇六〇）。
- 5 二〇一二年九月二十五日、西村守史氏への聞き取り調査による。